

グローバル化 止まらない

表題は日本経済新聞 1 月 1 日 1 面の大きなタイトルである。見出しから一米国と中国の対立、ロシアのウクライナ侵攻。分断の嵐が世界を襲い、グローバリゼーションは停滞する。それでも、外とのつながりに豊かさを求める人々の営みは途切れない。試練の先の「Next World(ネクスト・ワールド)」。世界をつなぐのはイデオロギー対立を超えたフェアネス(公正さ)だ。

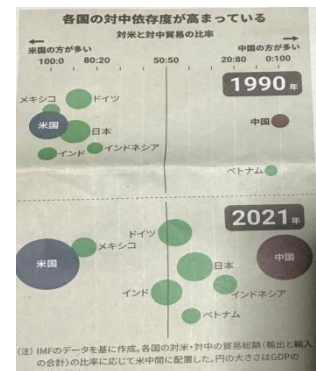
7 面の特集では「豊かさを希求 国境越え」というタイトル。グローバリゼーションは光と影を伴いながら人々の生活を変えてきた。移動や情報伝達の手段の発達は「世界の距離」を縮め、マネーの流通拡大とともにモノやサービスの往来を活発化させた。毛細血管のように広がったつながりは年を追うごとに密度を高めた。

グローバリゼーションが進展するなか、富や価値観をめぐる衝突も起きる。紛争や富の収奪などのあつれきも生じたが、交易を求めるヒトの欲求は自然の摂理。世界の国内総生産(GDP)は過去 1000 年間で約 580 倍に拡大した。

欧州は大航海時代に富を増やし、1700 年代には英国で産業革命が起きた。グローバリゼーションは技術革新とも密接に絡み合いながら世界各地に広がり、成長の礎を築いた。

行き過ぎた権益競争はグローバリゼーションのひずみも大きくした。アフリカや東南アジアなどは欧米諸国の植民地となり、奴隷制など人種差別も横行した。植民地政策は 1930 年代の世界恐慌の際にブロック経済の形成にもつながった。英国やフランスなどは本国と海外の植民地との経済的な結びつきを強め、排他的な保護主義で恐慌を乗り切ろうとした。第 2 次世界大戦の遠因にもなった。そして現代。資本移動の自由化やデジタル革命などによってグローバリゼーションは一段と進んだ。豊かさをけん引する一方で、恩恵に預かれない人々の反発も根強い。

第 2 次世界大戦後の自由貿易を主導した米国。圧倒的な経済力で世界をけん引してきたが、中国の台頭で唯一の超大国としての地位はぐらつく。米中は互いに経済依存を深めながらも対立し、世界は 2 つの大国のはざまに揺れる。各国・地域の対米・対中の貿易総額(輸出と輸入の合計)の割合を見ると、1990 年は日本やドイツなど 6 カ国のうち、ベトナム以外は中国より米国への貿易依存度が高かった。2021 年にはメキシコとインドのみに減った。世界全体でも中国を最大の貿易相手とする国・地域は 21 年時点で 60 と米国の 34 を上回った。



(2023 年 1 月 3 日)